

難波西鶴と

海の道

【11】

森田 雅也

前回はラッコの話でしたが、今回は北海道のタヌキの話です。

タヌキは、古くは「たけ」^{たけ}とも呼ばれていたようですが、日本ではキツネとともに人を化かす動物として有名ですね。

四国の芝石衛門理や佐渡島の話を始め、靈力の強いタヌキが存在したことは知られていますが、同時に童話にもある、和尚の木魚と争って腹鼓を打ちすぎ

て死んでしまった

「証誠寺」のタヌキ

や童話の「分福茶釜」

など、ユーモラスな存在でもありますね。

タヌキの靈力については、キツネとともに、今後出てきますので、(こ)では、松前のタヌキ話に絞りたいと思います。西鶴の『本朝二十不孝』(貞享3朝(1686)年刊)巻3(1688)「年刊」巻四の四「本に其人の面影」という話を紹介します。

松前の城下に、長く浪人暮らしをしている

西鶴からのメッセージ

岩崎数馬という武士がいました。妻はもともと立派な家柄のお嬢様でしたが、零落したこの家で苦勞しながら2人の息子を育てあげます。ある日、数馬はあっけなく世を去ります。

数馬の妻の嘆きはひどく、醜女であった容ぼうは日に日に瘦せ衰え、顔は青白くなり、見るからに恐ろしい形相に変わっていきま

す。妻はそのまま死んでしまいましたが、茶匙に付した後も、近所の人が岩崎の家に「この女の幽霊を見たという噂」が広まっていきま

す。息子たちとしては、母の幽霊が出没するといつつわを聞き捨て

にはできません。そんな時、家の庭に母の面影が見えます。兄は恐ろしくなって、「どうして成仏なさって下さらぬ。何とも情けないことです」と涙に袖をぬらしますが、弟は気丈にも母に向かって矢を放ちます。

そうすると母の姿が消えたので、その場を見ると古たぬきの鼻筋に矢が通ってしま

した。早速この武勇は城下の評判となり、殿様の耳にも聞こえます。ところが殿様の沙汰は、兄は母親を悲しむ武士の情けある者として二十人ぶちでお取り立てになり、弟はたど

え変化のもでも母親に弓を射た親不孝者としてお取り立てにはな

りませんでした。弟は、不孝者として松前に居られず、去っていくという話です。この殿様の裁定。名君なのでしょうか。暗愚なのでしょうか。

寛文9(1669)年に松前の殿様の収奪に抗議して、アイヌの首長シャクシャインが全蝦夷地のアイヌを糾合して大蜂起しますが、和議の場でシャクシャインは謀殺されてしまいます。有名なこの事件についても、松前の殿様が名君か暗愚かわかりません。何か西鶴のメッセージを思うのは、考えすぎでしょうか。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

人を化かすタヌキの話